

イオニア反乱の原因がスキュティア遠征以来長く温められてきたという説

キーナスト (Kienast, “Bemerkungen”, s.19.)

グランディー (Grundy, *Persian War*, pp.79-144.)

スキュティア遠征時にギリシア人僭主たちの間で醸成 (Ibid. p.84.)。

反乱計画の中心にいたのがアリストゴラス (Ibid. p.85.)。

ブレミール (A. Blamire)の疑問

“Herodotus and Histiaeus”, *CQ.* 53, 1959, pp.142-154.

アリストゴラスが演じた役割は小さい

グランディーの説は「極めて非現実的」(p.146.)

イオニア反乱は大衆の革命運動ではないという説

ウッド (H. Wood)

The Histories of Herodotus. An Analysis of their Formal Structure, Den Haag, 1972.

イオニア反乱は僭主の反乱

民衆の反乱という見方を全面的に否定 (p. 124.)

反乱はイオニア人の反乱ではない

民主制度は見かけだけ

民衆を自分たちの側に獲得するための僭主たちの一つの方策

アリストゴラスの指導に従う僭主たちの反乱であり、アリストゴラスは自分を救うために始めた

反乱は自由のための企てではなかった

ヴァルター (U. Walter)

“Herodot und die Ursachen des Ionischen Aufstandes,” *Hist.* 42, 1993, S.257-278.

イオニア貴族社会の歪みが原因

商業利益や自由への渴望に求める見解を退け

イオニア貴族社会の中の名誉と地位をめぐる構造的な競争状態が原因 (S. 278.)

アリストゴラスやヒスティアイオスの行動をイオニア貴族社会の競争構造の中で理解

イオニア貴族社会の構造についてはアルカイック期のアテナイの貴族社会を論じたシュ

タール (M. Stahl)の説を援用

M. Stahl, *Aristokraten und Tyrannen im archaischen Athens*, Stuttgart, 1987,

現在の状況

イオニア反乱が大衆的基盤を有しており時代遅れとなった僭主制を強要するペルシアに対する自由のための性格を有するのか

イオニアを経済的に困窮化させようとするペルシアの政策に対するイオニア人の憎悪の念に導かれているのか

ペルシア王の恩恵を巡る競争社会が生み出した歪みでしかないのか

イオニアの貴族社会の歪みなのか

原因をめぐって注目すべき点

単に原因をめぐっては多くの見解があり激しく論争されてきたということではない

イオニア反乱の原因をめぐる論争が過去のものではなく、現在進行中の論争という点にある

サイドに触発される「オリエンタリズム」と結び付く側面を有している点

ナクソス遠征:反乱の発端

イオニア反乱の引き金となったのはナクソス遠征の失敗

ナクソス遠征はペルシア帝国が抱える構造的な矛盾を露呈

帝国は勝ち続けなければならない

軍事的蹉跌は従属下にある住民をして帝国の能力を過小評価させ、ひいては反乱へと走らせる傾向がある

属州総督などによる反乱を予防するために高級官僚を互いに掣肘し合うように仕向ける

ベロソホ (K. J. Beloch) の指摘:「作戦の失敗は小アジアにおけるペルシアの名声を深くぐらつかせた」(*Griechische Geschichte*, II, 1, Strassburg, 1967, S.6.)

ペルシアによる勝利に次ぐ勝利→無敵という評判

スキュティア遠征において成果なく撤退→敗北の印象

同じことはナクソス遠征についても該当

「この遠征(ナクソス遠征)の失敗は、非常に長い間くすぶっていた焰を一挙に燃え上がらせる火花であった」(s. 7.)と評価

ペルシアによる軍事的蹉跌がイオニア反乱を誘導

軍事的蹉跌が属州民の反乱を招く例

スキュティア遠征後のビュザンティオンやカルケドン、アンタンドロスやランポニオンなど(Hdt. V. 26.)

これらの都市はダレイオスのスキュティア遠征に軍を派遣

遠征が失敗に終わり、遠征軍がスキュティアの地から撤退して来るとペルシアの宗主権に反抗→ダレイオスがヨーロッパに残置したオタネスはこれらの都市を攻略(Hdt. V. 26-27.)

遠征失敗後スキュティア側に寝返ったり、撤退する遠征軍に危害を加えたことがその理由

帝国の辺境地帯とも言える小アジアの沿海部を統治する方法としてこれらの地域にある諸都市の僭主との個人的な紐帯とペルシアの軍事的存在と威信が重要

ペルシアの軍事的存在は恒常的ではなく、その軍事活動が失敗するとたちまちにペルシアの軍事的威信は揺らいでしまう

そのことが辺境地帯にある諸都市の行動を怪しいものにする

マラトン遠征失敗後のエジプト(Hdt. VII. 1.)、ギリシア遠征失敗後のイオニア諸都市(Hdt. IX. 104.)の事例

→ペルシア帝国の構造的な問題

ペルシア王は常に自ら軍を率いて功績をあげねばならない。アイスキュロスの『ペルシア人』の中でアトッサが亡き夫ダレイオスの亡霊に語った言葉(Aesch. *Persae*, 754-758.)

ナクソス遠征の失敗がイオニア諸都市の反乱を招いた

遠征の失敗はイオニア人の間にペルシアを過小評価させる機運を生じる(Kienast, “Bemerkungen”, s.17.)

キーナストはスキュティア遠征の失敗からナクソス遠征の失敗に至る時期にペルシアの力の可能性と限界についてイオニアの指導者たちの間で評価作業が行なわれたと主張(S.18.)

アリスタゴラスがスパルタやアテナイで語ったペルシアについての評価(Hdt. V. 49; 97.)はナクソス遠征でイオニア人が得た経験に基づいて形成

ジョージスが「ペルシア現象」と呼ぶペルシア帝国の構造的な問題

ダレイオスは自らもかつてそうであったように、潜在的な王位僭称者が現われるのを警戒

総督や軍司令官を監視し権力を分散化することによって相互に掣肘させた

彼らは互いに牽制し合いながらペルシア王に忠義を励み、ペルシア王から名誉と恩沢に与るという競争関係の中に置かれていた(Georges, “Persian Ionia”, p.12)。

ペルシア王の恩沢に与るという点ではアルタプレネスのようなペルシア人王族であろうがヒスティアオスのような従属民出身者であろうが差別は無かった

このシステムは確かに広く帝国臣民の忠誠をペルシア王に吸い上げていくのにうまく機能

同時に脱落者・敗者を絶望的な反抗へと追いやっていく危険性を内包

遠征の発案者はアリスタゴラス

ナクソス人亡命者たちの要請を受けてアリスタゴラスはキュクラデス諸島に自らの支配圏を拡大する機会と捉えた

重装歩兵八千名、多数の艦船を要するナクソスを単独で制圧する力はミレトスには無く、ペルシアの力を借りねばならなかった

ペルシアの協力を得ることはこれまでのアルタプレネスとの良好な関係から容易であるとアリスタゴラスは自信を持っていた(Hdt. V. 30.)

アルタプレネスはアリスタゴラスの提案を喜んで受け容れただけではなく、派遣する艦隊の規模を二倍に増加(Hdt. V. 31.)

アルタプレネスはダレイオスの承認を得た上で、遠征軍を組織

遠征軍の司令官にはアルタプレネス、ダレイオス両人の共通の従兄弟にあたるメガバテスを任命(Hdt. V. 32.)

遠征軍はペルシア軍と同盟軍から成り、二百隻もの規模の艦隊を伴う水陸両用部隊

艦隊規模二百隻というのはナクソスの重装歩兵八千名に対抗しうる兵力量を輸送する能力を有していることを示す

当時の三段櫂船がその乗組員以外に収容できた最大値は四十名

二百隻の艦隊は八千名の重装歩兵をナクソスに上陸させ得る

このアルタプレネスの決断は現実

アルタプレネスは楽観視せず、攻城戦を含む戦闘を想定

遠征軍の司令官はメガバテス

アルタプレネスはメガバテスをアリスタゴラスの命令権下におく

指揮系統の二重性、不明瞭性

キーナスト:

アリスタゴラスは遠征軍の「道案内人」に過ぎない(Kienast, “Bemerkungen”, S.7.)

アリスタゴラスがスキュラクスを無断で釈放したことは明確な「上官に対する反逆行為

(Insubordination)」(s. 8.)

軍法に照らしてアリスタゴラスを上官反逆罪で処罰する権限をメガバテスは有していたことになる
しかし、メガバテスはそうはしていない。

アリスタゴラスが恐れたのはメガバテスとの諍いがミレトスの支配権を剥奪されるのではないかということ
とであって、上官反逆罪で告発されるのではないかということではなかった。

メガバテスにはアリスタゴラスを処刑することは出来なかった

何故ならアリスタゴラスはメガバテスの部下ではなかったから

この指揮系統の二重性、不明瞭性が両指揮官の対立を招き遠征の失敗と反乱の契機をもたらした
遠征軍が最初小アジア沿岸を北上してキオスのカウカサに向け航行したのはナクソス人の目から遠
征の目的を欺瞞するためではなかった

キオス更にはミュティレネの艦隊と合流するためでもあった

カウカサでの事件

自らの船に警備兵を配備しなかったスキュラックスの行為を重大な軍律違反とメガバテスは判断
メガバテスはスキュラックスを厳罰に処す

スキュラックスと顔見知りであったアリスタゴラスはメガバテスにその釈放を頼み込んだが聞き入れられ
ず、スキュラックスを勝手に釈放

メガバテスの怒りに対してアリスタゴラスは自分こそがメガバテスの上官であると主張して相手を沈黙
させている

衆人環視下での事件

スキュラックスがペルシア人司令官の手で厳罰に処せられたこと。

その処罰をめぐって両指揮官の間で激しい論争が戦わされたこと。

それ故、事件そのものは事実に基づいて恐らくイオニア人の中で語り広められたものをヘロドトスが
記録

腹を立てたメガバテスがナクソス人に通報して遠征そのものを台無しにしてしまったという話は在り得
ない。

メガバテス内通の噂は遠征が失敗した後アリスタゴラスによってでっち上げられたか、それとも遠征に
参加したイオニア人将兵の間で噂によって流布されたか、どちらか

キオスのカウカサからナクソスまで僅か一～二日の行程

その間に住民の避難や食糧の備蓄、家畜や農作物の搬入、城壁の修理や兵員の配備等を完了す
ることは不可能

亡命者の動向をナクソス当局が全く無視していたということは在り得ない。

少なくとも小アジア沿岸のギリシア人諸都市における動員とミレトスでの遠征艦隊の集結はこれらの
地を訪れる様々な商人によってナクソスに伝えられていた

ナクソス側の籠城戦の準備はもっと早い段階から着手されていた

ナクソス遠征は見事な失敗

アリスタゴラスの目論見は完全に外れてしまう

包囲を四カ月も続けてもナクソス攻略は達成されなかった

用意した資金も食料も尽きて遠征軍はミュウスに引き揚げざるを得なかった

失敗の責任が問われる

失敗をめぐるメガバテスとアリスタゴラスの間で論争と責任の押し付け合いの開始

メガバテスは遠征軍がミュウスに引き上げると艦隊から姿を消す

恐らくアルタプレネス、更にはダレイオス王に失敗の責任がアリスタゴラスにあることを報告するために下船

それと共にメガバテスの身近に控えていたペルシア人護衛隊も姿を消してしまった

艦隊で僭主たちの逮捕が行なわれたとき、ペルシア人はどこにもいなかった

メガバテスに対してアリスタゴラスが持ち出したのが、メガバテスの通報という噂(Hdt. V. 33.)

噂は根拠無し

アリスタゴラスが捏造して広めたか或いは巷間に既に広く流布していたかどちらか

アリスタゴラスには遠征の失敗の責任問題以上に深刻な問題を抱え込んでいた

アルタプレネスに約束していた莫大な戦費負担の実行を迫られていた

総督のアルタプレネスとの信頼関係を傷付けてしまった(Hdt. V. 35.)

ミレトスの僭主の地位を確保することは難しいと判断したアリスタゴラスはペルシアからの離反を決断

アリスタゴラスはミレトスにおいて自らの党派を構成する有力な人々に自らの決断を伝え、彼らの判断を仰ぐ(Hdt. V. 36.)

ペルシア帝国の事情に精通していたヘカタイオスは反対

他の者は離反に賛成

仲間の一人イアトゴラスをミュウスに停泊していた艦隊に派遣

ペルシアからの離反と各都市からの部隊を指揮していた僭主の逮捕と僭主制の廃止を人々に説く(Hdt. V. 37.)

アリスタゴラスをしてペルシアからの離反を決断ならしめたのは自らの地位保全のためではあったが、その彼をそこまで追い詰めたのはメガバテスとの不和とアルタプレネスとの信頼関係の破綻であった。

それはペルシア王やペルシア人総督とギリシア人僭主との奉仕と褒賞を基盤とする紐帯関係の脆さを露呈